
真・私の生きる道は……

チルノ・トレバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・私の生きる道は……

【Nコード】

N7935Y

【作者名】

チルノ・トレバー

【あらすじ】

一匹の黒き鷲が円卓の空に散った。だが彼の物語はまだ終わってはいなかった……

黒き鷲は未知の世界で再び空を飛ぶ！！

黒き鷲は円卓の空にて、歓喜に身を震わせる（前書き）

久々に書いてみたが、見るも無残な結果に……

黒き鷲は円卓の空にて、歓喜に身を震わせる

1995年5月28日　ベルカ絶対防衛戦略空域B7R通称『円卓』

この日、連合軍がベルカの生命線である円卓を奪取するべく、大規模な

航空部隊による進撃を開始した。

当初戦闘は熾烈を極めながらもベルカが優位に立っていたが、ウスティオ共和国の傭兵であるガルム隊が到着したことにより状況は一変する。

ガルム隊の圧倒的な技量により、次々に落とされていくベルカ空軍。

大勢は既に決していた。

勝つことが出来ないことを悟り、次々に退却していくベルカ空軍。だがそんな中、一機の両翼を黒くペイントしたフォックスハウンドが奮戦していた……

sideシェイド

「落ちろ!!」

俺はそう言いながら、目の前に飛んでいる連合軍機に向かってミサイルを撃つ。

相手は避ける暇もなくミサイルが命中し、爆炎を上げながら落ちていった。

「フウ……」

敵を撃墜したことを確認して息を吐く。

勝ち目が無いことは既に分かっていた……

だが俺は認めたくなかった。

まだ終わっていない、俺はまだ戦える……

そう心を奮い立たせ、俺はただ奴等を落とし続けていた。

「そうだ……まだ終われない。奴と殺り合うまでは!!」

俺そう言って操縦桿を握り締める。

俺の頭に浮かんでいたのはガルムの1番機……現れてから目覚しい活躍をしているあのイーグルだった。

間違はなく、奴は円卓（こく）に居る……そう確信していた。

先程まで優位だった戦況を覆したのは間違はなく奴だ。

奴には戦場を空気を変えることが出来るだけの力がある。

そう奴のことを考えながら、操縦していた時だった。

奴が俺の前に現れたのは……

「……見つけたぜえガルムウウウ!!」

俺はそう咆哮しながら、俺はイーグル（1番機）に向かって旋回する。

あの男と殺し合うために……

「ハッハア!! やっぱりこうでなくっちゃなあ!!」

奴と殺し合い初めて、どれだけの時間が経っただろうか？
だが俺には関係無い……今この瞬間、この時が俺の人生最高の時
なのだから……

俺はガラム1が次々に撃ってくるミサイルを避けていく。だが……

「ぐうお!？」

避けきれずに一発食らってしまう。かなり損傷が酷いのか先程から
警報が鳴り止まない。

俺と奴の腕前は天と地の差があった。

ボロボロで今にも墜落してしまいそうな俺のフォックスハウンド
に比べ、

奴の乗るイーグルは傷一つ付いていなかった。

「まさかここまで相手にならないとはな……」

そう言った俺が感じているものは絶望感では無く、歓喜だった。
自分より強い相手に会うことが出来た……ただそのことが無性に
嬉しかった。

暫しの間喜びに浸っていると、警報が一段と酷くなってきた。

……機体が限界のようだ。

「最後まで付き合ってもらおうぜ？」

俺はそう言って、イーグルに向かって一直線に向かっていく。

奴も俺の意図を読み取ったのかこちらに向かってくる。

イーグルを照準を合わせ、トリガーに指を添える。

ミサイルはもう弾切れになっており、ガトリングの弾薬も残り僅かだった。

イーグルが射程内に入るのがやけに遅く感じる。

まだだ……まだ引き付けろ！！

息が荒くなるのが分かる。

そしてイーグルが射程内に入った瞬間、トリガーを引いた。

イーグルが一瞬で隣を通り過ぎる。

そして次の瞬間、俺の機体は爆音と共に炎包まれ墜落していく。

「最後の最後で……楽し……」

そこまで言った瞬間機体は爆散し、俺意識は永遠の闇に沈んでいった……

主人公紹介1（前書き）

エスコンZEROの世界での主人公設定です。

主人公紹介 1

シェイド・ブランダッガー

容姿

ルックスは上の中 金髪青眼で右眼が隻眼。
背中まで届く髪を一つに纏めている。

性格

豪胆で豪快な性格。

大の戦闘好きでもあり、戦闘になると興奮していき
性格も無謀な物に変わる。

備考

ベルカ空軍第0特殊空戦部隊部の隊長を務めている男性。
年齢は28歳で階級は少佐。

TACネームは「スカイハート（空の心）」でコールサインは「
ブラックウィング1」

ベルカのトップエースの一人で黒翼の荒鷲と呼ばれていた。

戦闘機乗りとして極めて高い能力を持つが、自分を上回る実力を
持つ

パイロットを探し求めており、中でもガラム1との対戦を熱望し
ていた。

1995年5月28日連合軍が円卓を奪取するべく、進攻してき
た際は

ベルカ軍が劣勢に陥り味方が退却していく中、
次々に連合軍機を落とす、撃墜数は24機に達する。

そしてその戦闘のさなか、探し求めていたガルム1を発見し戦闘
を仕掛ける。

激しい戦闘末、ガルム1に撃墜される。

シェイドは敗れはしたものの、後悔は無く満ち足りた気持ちで人
生を終えた。

黒き鷲は異世界に辿り着き、その身は別の姿に変わる前編（前書き）

短いっす。しかも酷い出来です。今回は前編です。

黒き鷲は異世界に辿り着き、その身は別の姿に変わる前編

円卓の空で散ったベルカ空軍のトップエース『黒翼の荒鷲』ことシェイド・ブランダッガー。

彼の生涯はこれで終わるはずだった。だが運命の悪戯か、彼は自らの居た世界とは違う、別の世界に飛ばされてしまう。だがそれだけではなく、彼の身体にはある変化が起きていた……

sideシェイド？

「ここは……」

目が覚めるとそこは見知らぬ場所だった。

一体何が起きたんだ？

俺は確か奴との戦いで死んだはず……

辺りを確認しようと、身体を起こそうとするが……

「グ……」

身体に激痛が走り、身体を動かすことが出来なかった。

どうやら機体が爆発した時に負傷したみたいだな。

特に脇腹の傷は深く、血がとめどなく流れ続けていた。

このままでは間違いなく死んでしまうだろう。

俺は辛うじて動く首を何とか動かし、周囲を確認してみる。

どうやら俺は、辺り一面の草原に倒れているらしい。

だが……

「有り得ない……」

そう……有り得ないのだ。円卓にこのような場所は存在しない。
円卓は広大な鉾山地帯であり、山が広がっている。
その上高野が広がっている為、自然は存在しないに等しい。
俺は自分が何故ここに居るのかを考えていると、急に意識が遠のいてきた。

「血を流し過ぎたか……」

そう言いいった直後、俺は意識を失った……

次に俺が目を覚ますと、今度はベッドの中に居た。
今度は何処に居るんだ？

辺りを確認しようとする、体の痛みが和らいでいるのに気が付く。

気になり、傷を確かめてみた。

誰かが手当てをしてくれたのだろう。脇腹の傷口には包帯が巻かれていて、

他の傷口も丁寧に手当てされていた。だが……

「なん……で……？」

俺は頭の中が真っ白になる。何故なら

「俺の身体に一体何が起きたんだ……？」

俺の身体に女性の象徴である。豊満な胸があったのだから……

「待て待て待て！！可笑しいだろ！？俺は男だぞ？
それなのに何で胸がある！？」

俺はそう言って頭を抱える。

俺、女だったか！？

いや俺は男だった。間違いなく男だったはずだ！！
記憶をたぐり寄せ、確かに自分が男であることを確認する。
それなのに何故、俺は女になっている！？

「クソッ訳が分からん！！」

そう一人混乱していると、一人の中年の男が入ってきた。

「目が覚めたみたいだな」

「貴方が手当てしてくれたのか？」

「気紛れに助けてやっただけだ」

「例え気紛れでも貴方に命を救われたのは事実だ。
礼を言わせてくれ、ありがとう」

俺はそう言って頭を下げる。それを見た男は照れ臭そうに顔を背けた。

side out

黒き鷲は異世界に辿り着き、その身は別の姿に変わる前編（後書き）

うまく書けない……

次は後編です。

黒き鷲は異世界に辿り着き、その身は別の姿に変わる後編（前書き）

前よりは長いです。書く長さとしては、これぐらいがしっくりくるな……

酷い出来ですが、良ければ見てください。

黒き鷲は異世界に辿り着き、その身は別の姿に変わる後編

寝室

sideシェイド？

「異世界……か」

俺は誰も居ない部屋で、一人そう呟く。

あの後、俺はここが何処かロック・フォルティア（俺を助けてくれた男の名前だ。

あの後教えてくれた）に聞いてみた。

だが聞き覚えの無い国の名前に何かが引っ掛かり、他にも色々質問してみた。

そして全ての質問を終え、確信する。

ここは俺の居た世界ではないということを……

「……」

俺はただ無言で天井を見つめる。

死んだはずの俺が何故ここに居るのか？何故身体が女性になってしまったのか？

様々な疑問が頭に浮かんでは消えていく……

「クソッ……」

俺はただ拳で壁を殴りつけて、沸き上がる不安を誤魔化すしか出来なかった……

数日後

傷は大分良くなり、歩き回ることぐらいは出来るようになった。この数日の間でこれから、どうすべきなのかを考えていた。戻る手立てが無い以上、この世界で生きていくしかない。だがそうなる俺は、女性として生きて行くことになる……今まで男として生きてきた俺に出来るのか？

「やるしかない……か」

そう言葉に出して決意を固める。例え認めたくなくても、もう身体は

女性になってしまっている。

その為俺には女性として、この世界で生きていくしか道は残されていなかった。

やること無い俺が、一人過去の戦いを思い出していると、ロックが部屋に入ってきた。

「傷の調子はどうだ？」

「おかげで大分良くなったよ」

「フン……そいつは良かった。早くその傷直して、ここから居なくなってくれ」

ロックはそう憎まれ口を叩きながら、ベッドの横の椅子に座る。こうして他愛ない話をするのが俺達にとって、日課になっていた。

そのおかげで暇を潰すことが出来、感謝している。

最初、ロックと話す時は敬語を使っていたが、堅苦しいから止めろと

言われてからは敬語で話すのは止め、こうしてフランクに話している。

「それで……お前が住んでた星はどんな所なんだ？」

ロックが俺の星の話を聞いてくる。

「私が住んでいた星の話か？……長い上につまらないぞ？」

それに私はただの戦闘機のパイロットだったから、自分が経験した戦争の話しか出来ないが……」

「それでも構わない。聞かせてくれ」

「分かった。それでは話すでしょう。私が空から見た、あの世界の話……」

俺は静かに語り始める。自分が体験した、ベルカ戦争の話を……

私の住んでいた星には、幾つもの国が存在していた。

その中の内の一つ、ベルカ公国……そこが私の故郷だった。

軍事国家だったベルカ公国は、次々に国土を拡大していったが、その結果重度の財政難に陥ってしまった。

政府は財政難を立て直すために、占領してしていた国を次々に独立させ、

自国から切り離すことで不況を回復させようとした。

だが不況は回復せず、周辺諸国から援助を受けることで何とか国を維持していた。

だがそんな政府の弱腰な政策に、国民の不満は募らせていった……国民達は「昔ながらの強いベルカ」を求めていたからな、政府の弱腰な政策に耐えられなかったんだろう。

その中、極右政党である「ベルカ民主自由党」が国民の支持を得て政権を掌握し、

「強く正当な国家を再生する」をスローガンに軍備の増強を始める。

その後独立させた国の一つであるウスティオに膨大な資源を発見、ベルカは息を吹き返すことが出来た。

ベルカはその資源地帯一帯を「ベルカ絶対防衛戦略空域B7R」と名称し、

その資源により軍拡化を推し進め、その軍事力を背景に

周辺諸国に侵攻を始めた。

当初は優位に立っていたベルカだったが、ウスティオが雇った傭兵部隊の

一つであるガラム隊の活躍により、ベルカは徐々に劣勢に追い込まれていった。

B7Rまで追い込まれた私達ベルカは必死に抵抗した。
自分達の故郷を守るために……

その甲斐あってか、戦況は私達が優勢だった。

そう、奴等が現れるまでは……

ガラム隊がB7Rに現れ、ベルカ空軍を蹂躪していく……

奴等が現れた僅かな時間で戦況は覆されていた。

私も最後に奴等と戦い、敗北した。

その後のことは分らないが、恐らくベルカは負けただろう。

B7Rはベルカの生命線だからな。ここを奪われたら、ベルカに勝ち目は無いに等しい。

「……これが私が話せる全てだ」

「本当に長い上につまらないな……」

「だから言っただろ……つまらないって」

「まあいいだろ……話してくれてありがとよ」

その後他愛ない話をした後、ロックは去っていった。

なぜ死んだはずの俺が、この世界に飛ばされたのか……それは分からない。

だがこの世界の飛ばされたのには、何か理由があるはず……
自分なりにこの世界を生きて行こう……

一人そう考えるのだった。

side out

フリーフィンダ（前書き）

相変わらず短いっす。

書いても書いても上手くならない……

フリーフィング

惑星フェルメト

この惑星はトランスバル皇国の辺境にあり、五年前にトランスバル皇国の支配下に入った星でもある。

この星には様々な国が存在しており、その中の二つの大国であるデルシーズ共和国とグリザ帝国が東西に分かれ、戦争を繰り広げていた。

当初は一進一退の攻防を繰り返していたが、デルシーズは徐々にグリザに押され始め、デルシーズはペルナ防衛要塞を残し、国土を制圧されてしまう。

そこでデルシーズは傭兵を雇うことで戦力を補おうと考えた。

その雇った傭兵の中にジェナ・スコールと名前を変えたシェイド・ブランドガールの姿があった……

トランスバル歴405年5月24日　デルシーズ共和国　ペルナ防衛要塞作戦会議室

sideジェナ

私がこの世界に来て、2ヶ月が経つ。

傷が癒えロックの下から去った私は、傭兵として生計を立てていた。

その際に名前をジェナ・スコールに変えた。

自分がこれから女性として生きていく……その意思表示のために

自らの名前を変えたつもりだ。

だが……いざ、こうして女性として生きてみると色々と戸惑ってしまう。

それでも私は男性と女性の違いに戸惑いながらも、今もこうして生きている。

今私が何処に居るかというと、トランスバール皇国の辺境にある惑星フェルメトに居る。

ここに来た理由は傭兵を募集していたこともあるが、一番の理由はこの星が私が生きていた、あの世界に似ていたことにあった。

この世界で生きると決意はしたものの、やはり元の世界に戻りたいと思うことはある。

だからかもしれない、私がこの星を訪れたのは……

「さて諸君、よく集まってくれた。私はペルナ防衛要塞の司令を任されている、レイゼル・アーデルグ中將だ」

しばらくの時が経ったあと、要塞の司令であるレイゼル中將が姿を現した。

「早速が出撃命令だ。これより作戦を説明する」

モニターに現在アバリー山脈のマップが表示しされ、中將が作戦を説明し始めた。

グリザ帝国の爆撃機が護衛と共に、ペルナ防衛要塞に向かって、進軍を開始したという情報が入った。

最後の砦であるペルナ防衛要塞を落とされてしまえば、デルシーズに未来は無い。

至急アバリー山脈に向かって出撃し、グリザ軍を迎撃せよ。

なお今回はあくまで迎撃任務だ。

深追いは禁ずる。

相手はあのグリザ空軍だ油断するな。

「説明は以上だ。各員出撃してくれ」

説明が終わった後、私達は格納庫に向かった。

噂に聞くグリザ空軍か……楽しみそうだ。

私はこれから戦う相手のことを考え、一人心躍らせていた。

side out

出逢う両者（前書き）

一日二話投稿、まさかやれるとは……
今回早速オリジナル入ります。

出逢う両者

アバリー山脈

アバリー山脈に到着した傭兵部隊は、グリザ空軍と激しい空戦を繰り広げていた。

「後ろを取った！」

「敵機撃破！今回はガツポリ稼げそうだな」

「クソッ後ろにつかれた！！」

「ぼさっとするな！落とされるぞ！！」

激しい戦闘が繰り広げられる中、一際活躍している機体が居た。両翼を黒くペイントした多目的戦闘機『フォルゾン』が次々にグリザ空軍の

『アシユッド』を撃墜していく……

グリザ空軍のパイロット達は、目の前で起きている光景に見開くことしか出来なかった……

sideグリザ空軍パイロット

今回は楽な任務のはずだった。

攻撃目標はただの防衛要塞、戦力だって満足に残ってない。それに比べてこっちは大部隊、負ける要素なんかあるはずが無か

った。

連中は傭兵を雇ったらしいが大した脅威にはならないだろう。そう思っていたんだ、あいつに会うまでは……

「クソッ振り切れない!!」

俺は必死に逃げ回っていた。後ろに食らいついてくる一機の戦闘機から……

本来ならどうにかして反撃するだろう。だが俺の操縦技術は奴には通じなかった。

「うっうわ!？」

俺は後ろから飛んできたミサイルを間一髪避ける。

先程からアラートが鳴り止まない。

どんなに逃げても追ってくる……俺はこのアラートに恐怖を感じていた。

死にたくない……

今頭の中にあるのはその言葉だけだった。

俺は必死に攻撃を躲していく……だが、一発のミサイルが機体に命中してしまった。

「うわあああ!？」

脱出することもままならず機体は爆発し、俺は炎に包まれた……

side out

sideジェナ

「敵機撃墜」

敵機の撃墜を確認し、直ぐにレーダーで敵機を探す。

そして爆撃機の反応を確認した私は、爆撃機に向かって機体を加速させた。

「捉えた……」

その後私は機体を爆撃機が射程距離に入るまで接近させ、ロックオンする。

「FOX2」

そして爆撃機に向かってミサイルを発射した。ミサイルは爆撃機に命中し、爆炎を上げ

アバリー山脈へと墜落していく。

その後も近くの爆撃機を次々に撃墜していく。

そして最後の一機を撃墜しようとした時だった。

「ミサイルアラート!？」

コクピットの中でアラートが鳴り響く。

私はほぼ反射的に機体を反らし、ミサイルを避けた。

「アイツか!!」

レーダーでミサイルを撃ってきた機体の位置を確認し、奴に向かって機体を旋回させた。

「食らえ！」

私はそう言いながら機銃を撃つ。

だが奴が乗る『ポーフェルデ』は上手く旋回し機銃を避けた。

私は奴と激しい空戦を繰り広げていた。

奴の腕前は私が想像していたよりも高く、一向に決着が着かなかった。

《スカイハート、作戦は既に成功している。帰投せよ、繰り返す帰投せよ！》

「今後ろを見せたらやられる！奴を倒さなければ帰投は出来ない！！」

敵機を撃墜した後、帰投する以上！！」

《待て！スカイハ……》

私はそう言って強引に通信を切る。

実は帰投は可能だったのだが、目の前の敵から逃げる気にはなれなかった。

久しぶりに出会った好敵手に心が踊った。

《こちらはディルマー・カルバーリンだ。フォルゾンのパイロット、いい腕前だな》

通信を切ってから少し経った後、突然奴から通信が入ってきた。

「こちらはジェナ・スコール。そちらこそ、いい腕をしている」

《！……女か？》

私の声を聞いたディルマーは僅かに息を飲む。

確かに私のように傭兵で、尚且つ戦闘機のパイロットをやっているものは少ない。

だが自分が女だということで、侮られるのは気分が良いものではない。

「不満か？私の様な女が相手なのは」

私は不快感を隠さずにそう聞く。

ディルマーはすまんと詫びた後、弁解してきた。

《いや驚いているだけだ。男顔負けの戦闘機動だったからな》

「……それは褒め言葉ととっていいのか？」

《俺の最大限の賛辞だよ》

ディルマーはそう言いながら、ミサイルを撃ってくる。

私はミサイルの間を縫うように避けていく。

すぐ隣を通り過ぎていくミサイルにスリルを感じながらも、奴に向かって

ミサイルを撃つ。

ミサイルは左翼に命中し、『ポーフエルデ』は片翼を失なう。

《クソッ!!》

片翼を失いながらもデイルマーはなんとか飛行を続けていた。

「脱出しろ、ここで死に急ぐこともないだろう」

私は脱出を促すが……

《……脱出しても帰る場所はない》

「……どうということだ？」

《グリザでは傭兵は捨て駒同然だ。俺みたいに仕事の出来ない奴はあの国じゃ生きていけない……ノコノコ帰って所で、口封じに殺される

だけだろうな。そういう国なんだよ……グリザ帝国は!!》

「……」

デイルマーが悔しそうにそう語る。

私はその言葉をただ静かに聞いていた。

《だからあの国にはもう俺の居場所はない。だからここで死んでも「だったら……」ん?》

「だったら私が居場所を作ってやる」

《何を……》

私の突然の言葉にデイルマー困惑しているようだった。

「いいから脱出しろ……後は私がなんとかしてやる」

「分かった……どうせ俺は死んだようなものだ、お前を信じよう」

そう言ってデイルマーは機体から脱出した。

「敵を撃墜した、これより帰還する」

私はそう通信しながらも、デイルマーが脱出した方向に向かって機体を旋回させた。

side out

こうしてアバリー山脈での戦闘はデルシーズの勝利で終わった。
この勝利がデルシーズ共和国へどのような影響を及ぼすのか？
それを知る者は誰も居ない……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7935y/>

真・私の生きる道は……

2011年12月2日16時46分発行